朝来中学校

読書の楽しさを感じ、広い視野をもって深く考える
～あさご森の図書館を中核とした校区小中学校・保護者・地域との連携～

１　テーマ設定の理由

(1)　読書は生徒の知的活動を増進し、人間形成や情操を養う上で重要な活動である。本校の生徒は過去数年の全国学力・学習状況調査の結果から、場面の展開や登場人物の心情変化など、描写を基に捉える「読むこと（読解力）」に課題がある。また、学校以外で読書を全くしない生徒が半数を占め、読書嫌いの生徒が４割程度いる。さらに、スマートフォン等によるＳＮＳの利用時間が年々増加している。

そこで、読書の楽しさを感じる読書活動を推進することで、学校以外での読書時間が増え、同時にスマートフォン等の利用時間が減少すると考えられる。また、読書を通して、視野が広がり、深く考え、物事にじっくりと取り組む力が養われることを期待し、研究主題を設定した。

校区にある「あさご森の図書館」と連携をすることで、図書館利用の増加のみならず、読書活動の有効な手段などについて専門的な立場から指導助言を頂き、校区小学校や保護者にも読書活動についての啓発を行い、共に取り組むことで、より一層読書活動の推進が図れると考えた。

２　具体的な取組

(1) 学校図書館を活用した言語活動のあり方

ア　学校図書館の本を使ったビブリオバトルの授業

２年生の国語の授業でビブリオバトルを行った。校区小学校教職員及びあさご森の図書館職員にも研究授業を参観頂き、様々な視点から指導助言を頂いた。

（研究授業の様子）

（チャンプ本の紹介）

(2) 豊かな心を育む読書活動のあり方

ア　文化祭意見発表で読書活動を取り上げたテーマ

読書の在り方について全校生が深く考える機会を設けた。文化祭当日はあさご森の図書館職員にも聴講頂いた。

イ　お薦め本紹介

生徒会が毎月実施している生徒間で感謝を伝える「ありがとうカード」を１１月は、読書月間と題して「お薦め本カード」を生徒が作成し、校舎内に掲示した。

（文化祭意見発表「本と私」）

（お薦め本の紹介カード）

(3)家庭と連携した読書習慣の育成

ア　読書実態アンケートを保護者にも実施し、保護者と連携した事業を推進

・保護者から生徒へお薦めの本を紹介する機会を設けた。

・読書活動推進事業の趣旨や取組内容について学校便りや HP、PTA 会報で知らせた。

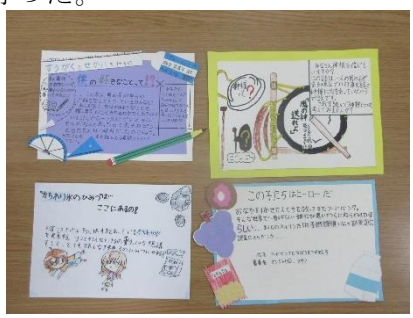
(4)中学校区内の小学校と連携した読書活動のあり方

ア　読書実態アンケートを児童生徒及び教職員に実施し、小中で実態把握や課題について共有を図った。

イ　中学生がポップを作成し、小学校に届けポップの掲示を行った。

ウ　中学生による小学生低学年への読み聞かせを行った。

（中学３年生による読み聞かせ）


（中学１年生が作成したポップ）

(5)地域全体による効果的な読書活動のあり方

・あさご森の図書館に「ギフトツリー」と題した掲示物を、小学生・中学生・保護者・地域住民等が協同で作製し、利用者の交流を図る。

(6)ボランティア等との連携による図書館運営並びに読書活動推進のあり方

・あさご森の図書館の職員や読書ボランティアに学校の図書室の運営方法や施設、蔵書等について意見を仰いだ。

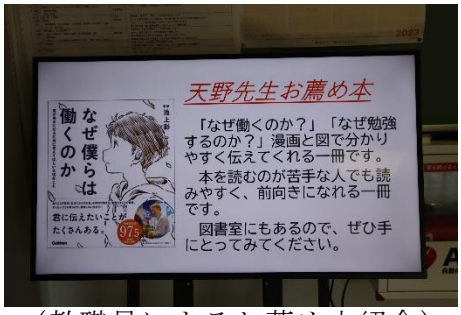
（あさご森の図書館で校内研修）

（図書室の整理整頓及び模様替え）

(7) 推進教員（司書教諭等）を中心とした学校図書館の活性化

・学校の先生同士、先生から児童生徒へ自分のお薦めの本を紹介する機会を設けた。

・生徒玄関に設置しているディスプレイに教職員から生徒へお薦め本の紹介を行った。



（教職員によるお薦め本紹介）

（神戸新聞に掲載される本の記事）

(8) その他の取組

・２学期以降、部活動の無い水曜日を「あさご森図書館利用推奨日」として下校時に、あさご森の図書館の利用を促した。

・あさご元気祭りで、ボランティア参加生徒が読み聞かせを行った。

・読み聞かせの事前学習として、あさご森の図書館に出向き、読み聞かせの基本的な内容について図書館職員から指導を受けた。

・朝来中学校の生徒がお薦めする本を「朝中生お薦め本」のコーナーを、あさご森の図書館に設置して頂いた。

（下校時に図書館への立ち寄り）

（あさご元気祭りで読み聞かせ）

（読み聞かせの事前学習）

（朝中生お薦め本コーナー）

３　成果と課題

(1) 成果

一番の成果は、生徒の本への興味関心が高まったことである。ビブリオバトルや小学生への読み聞かせ、ポップ作成やお薦め本紹介などの活動を行ったことで、生徒は必然的に本を手にする機会が増えた。ビブリオバトルでは質問を友達に積極的に行う

姿も見られた。校舎内に掲示してある「お薦め本紹介カード」の前で立ち止まり、友達と笑顔で会話する場面にも多く遭遇した。生徒と生徒が繋がる手段として、本が一役買っていることが実感できた。

保護者へ Web 上でアンケートを実施したところ、回答しめきり日を待たずに、即日のうちに７割強の保護者がアンケート回答された。また、保護者にお薦め本紹介を依頼したところ、手書き作成にも関わらず、２０名以上もの方に提出頂き、生徒玄関に掲示することができた。これらは、我が子の充実した読書活動への期待と保護者自身の本への興味関心の高さがうかがえた。

あさご森の図書館では、コロナ禍もあり利用者が減少している状況に悩まれていた。本事業の取組は、双方にとって利益が一致する。読書活動に関することの多くを、あさご森の図書館に連絡し、その都度助言や良いアイデアを提案頂いた。授業でも積極的にあさご森の図書館を利用したことで、生徒自身もあさご森の図書館への親しみが増し、確実に利用増加へつながっている。このことは中学校３年間のみに限らず、生涯にわたって図書館を利用するきっかけになったと思われる。

(2)課題

課題は、本事業の研究テーマ「読書の楽しさを感じ、広い視野をもって深く考える」の前半部分「読書の楽しさを感じ」は本年度の事業を通して、達成しつつある。一方で、後半部分の「広い視野を持って深く考える」までは至っていない。「広い視野」とは、どのような視野を指すのか。「深く考える」とはどのような考えを意味するのか。それらを数値化できるのか。など研究テーマの具現化が早急に必要である。

初年度であったため、手探りの状態が続いた。事業内容については計画を立てていたが、いざ実施すると様々な課題が出てきた。例えば「読み聞かせをする」という事業は決まっていたが、読み手は何年生がするのか。聞き手は何年生を対象にするのか。読み聞かせをするなら「あさご森の図書館」で指導を受けた方が良いだろう。学活等を利用して練習もした方が良いだろう。国語科でするのか学級担任が主導するのか。小学校への移動手段はどうするのか。次から次へと課題が出てきた。それらの課題を職員間で連携をとりながら進められたことは、職員の協働性が高まり功を奏したが、計画段階で、より具体的に担当者やタイムスケジュールを決めておく必要があった。

４　まとめ

日本ではいつのまにか、本は「当然読むべき」ものから「別に読まなくてもいい」ものへと変化してしまった。これも時代の変化だ、とおだやかに受け入れてしまう人もいるかもしれないが、私はまったく反対だ。読書はしてもしなくてもいいものではなく、ぜひとも習慣化すべき「技」だと頑固に考えている。(「読書力」斎藤孝　まえがきより)

著者の言葉を借りれば、私たちは確信をもって読書文化を復興する責があることになる。この考えに賛否あるかもしれないが、少なくとも本事業で児童生徒が人生観を変えるような素晴らしい本に出合ったならば、そのことを喜ばない人はいないと思う。そんな一助となる事業を次年度は推進していきたい。

５　参考文献

読書力（著者：齋藤　孝）